

この効率の悪さは、企業活動にも影響を与えている。「ミャンマーは新たな投資先として日本企業の関心が高く、ここ1年で約400社が視察に訪れました。しかし、電気や道路などのインフラ不足に加え、金融機能が整っていないことへの不安から、現実的に進出を考えているのはごくわずかです」と野中さんは話す。

**金融の近代化で  
経済発展を引っ張る**

市場経済化が進み、海外からの投資も増えれば、どんどんどお金の流れが活発になっていく。現金取引から電子決済へ、手作業から自動処理への転換が必要だ。そうすれば、銀行間、企業間の資金決済、調達や運用がスムーズに回る。金融セクターの近代化。それこそ、経済発展のカギなのだ。

ミャンマーには5つの国営銀行と21の民間銀行がある。その中で最も「アナログ」と言われているのが、日本では日本銀行に当たるミャンマー中央銀行だ。

中央銀行の役割は、いわば民間の銀行をつなぐハブ。日本銀行は「日銀ネット」と呼ばれるネットワーク・システムを通じて、国内の銀行を専用の通信回線ではないでいる。そのおかげで取引がオンラインで処理され、大量かつ瞬時の決済が可能に。銀行間でお金の

やり取りができる。しかしミャンマー中央銀行には、国内の銀行どころか、ヤンゴン、ネビドー、マンドレーにある自身のオフィスをつなぐオンライン・システムさえない。

平日の午後2時、中央銀行ヤンゴンオフィスを訪れると、ちょうど銀行間の手形の決済をしていた。部屋には100人ぐらいいる。各銀行の担当者がじっと待っている。その片隅では、4、5人の中央銀行のスタッフが手形を集めて電卓をたたき、手形交換の作業中。停電のため冷房が止まり、部屋の中はサウナのような暑さだ。

やっと作業が終わったかと思いきや、「金額が合わないのでもう一度やり直します」という声が部屋に響く。みんな、ぐったりした表情になる。「手形決済に毎日3、4時間かかる。各銀行の支店から接続して決済できるシステムがあったら便利ですが」と中央銀行のスタッフが話す。

「日本も30数年前はこうだったんですよ」と、ミャンマー中央銀行で国際通貨基金（IMF）ゼネラル・アドバイザーを務める田中克さんが教えてくれた。「中央銀行がなかなかオンライン・システムを整備できない間に、民間の銀行の中には店舗同士をつなぐネットワークやATMを整備したとこ



ヤンゴンのパゴダ内にもATMが。引き出しのみできる

ろもある。中央銀行としては、自分たちも早急に近代化が必要だ」という危機感を持っています。

その思いを受けて、中央銀行の業務の効率化を支援しているのが日本。「日銀ネット」のシステムをミャンマー仕様に開発し、これから導入していく計画だ。「決済がオンラインでできるようになれば、一般の人々にも企業にも、そしてこの国の経済にもプラスになります。世界最先端の日本の情報通信技術を生かして、早急に近代化を進めてほしい」と田中さんは期待する。

国を支える金融セクターの近代化に挑むミャンマー。まさにこれからが変革の時代だ。

中央銀行ヤンゴンオフィスにて、手作業で行われる手形の決済。後ろは、作業が終わるのを待つ各銀行の担当者



「日本のATMは世界最先端。1台で紙幣を使い回すことで、引き出し、振り込み、預け入れに対応できます。中央銀行総裁などから「それは魔法か」と驚かれました」と田中さん



振り込みなどのシステムがないため、何をしても現金が必要。高額紙幣が少なく、金額が上がれば大量の札束に



**現金に頼らざるを得ない  
社会**



ミャンマー経済の中心地、ヤンゴン市内の銀行窓口。カウンターに札束がどっさり積み重ねられていく。市民が自分の口座からお金を引き出したところだ。ミャンマーは「現金主義」。大きな買い物にはトラックいっぱい積んだ現金で支払うこともあるという。

「日本での高額な買い物にはクレジットカードや振り込みでの支払いが常識ですが、ミャンマーではまだクレジットカード自体が普及していません。ヤンゴンに出張所を構えるみずほコーポレート銀行の野中鉄朗所長はそう話す。

実は、この国では大半の人が銀行口座を持っていない。その理由は、なんとといっても「不便だから」。窓口で手続きをしてから、お金を手にするまでなんと半日。紙の帳簿で口座を管理し、手作業で残高確認を行うため、時間がかかってしまう。

**効率アップで経済を動かす**

経済活動のカギとなるお金の流れ。ミャンマーの着実な経済発展を支えるため、金融セクターの改革が始まった。

写真 (P12右上以外) : 谷本美加



残高管理などはすべて手作業。時間がかかり、ミスも起きやすい

